湯殿（ゆどの）の渡しと旧新河岸川

舟運の盛んな頃、下福岡にはハヤフネの渡し、下手の渡しがありましたが、これらは公的なものではなく、周辺の人たちが日常の往来に利用していたものです。下手の渡しは、主に東大久保（富士見市）の農家が新河岸川を越えて畑耕作にいくために利用しており、この渡しの廃止後に少し下流の現在地に湯殿の渡しができたようです。

渡し船はトッコシブネと呼ばれていました。なお、湯殿の名称は、渡し守であった原田家の屋号が「ユドノ」であるため、これに由来すると考えられます。

福岡橋から志木方面に直線的に延びる現在の新河岸川は、大正十年（1921）に開始した河川改修で新たに開削されたもので、湯殿の渡しは、改修以前の旧流路で行われていました。

新河岸川の渡し場と橋の所在地

渡し船として使われたとされるセッショウブネ